

〔論文〕

## 犯罪・ミステリー映画の日中比較 (5)

近 藤 泉

名古屋学院大学国際文化学部

### 要 旨

本論文においては、犯罪映画・ミステリー映画について、日本と中国の作品の比較を行う。このテーマについては、日中いずれにおいても、先行研究が存在しない。調査するのは2010年～2018年の9年間とし、日本・中国とも各年度の興行収入ランキング上位の計約40本の作品を調査対象とし、日中計80本程の作品について、58の項目について該当するかチェックし、表を作成した。日中の表を比較することにより、できるかぎり客観的に日中の作品の比較を行う。ページ数の都合により、論文は数回に分け発表、3回目以降は、表に入っていない2010年～2018年の中国の映画・ドラマ計二十数作品や2019年以降の中国の映画・ドラマ計二十数作品も、比較作業のため、補足的に取り上げてきた。((4)までに触れてきた中国の映像作品は90作品程に及ぶ。)今回が5回目となる。これにより、日中の映画の比較ができるだけでなく、両国の社会や人々の意識の違いをも見て取れるものと考えている。

キーワード：日中比較, 犯罪映画, ミステリー, 映画

## A comparison of Japanese and Chinese crime and mystery films(5)

Izumi KONDO

Faculty of intercultural Studies  
Nagoya Gakuin University

---

発行日 2024年3月31日

## 1. はじめに

### 1.1

本論文は、日本と中国の犯罪・ミステリー・推理関連映画を比較するものであり、2010年～2018年の9年間に公開された映画を中心に比較する。

日中の比較にできる限り客観性を持たせるため、中国の作品としては、中国における2010～2018年にかけての毎年度の興行成績ランキング（大陸以外・外国の作品を含むランキング）上位100位までに入った犯罪関連映画37本、日本の作品としては、日本における2010～2018年にかけての毎年度の興行成績ランキング（外国の作品を含むランキング）上位30位までに入った犯罪関連映画43本を取り上げ、両国合わせて計80本ほどの映画により日中の比較を行う。

また、本論文で扱う中国映画は、大陸の映画に限定する。香港映画にも警官・警察や犯罪組織などが登場する映画は多いが、そうした大陸以外の映画は含まない。なお、大陸と香港の合作（1997年に香港が中国に返還されてから、香港映画は大陸資本に依存するようになり、また香港映画界の人材が大陸に活躍の場を求め、そもそも大陸と香港の境が不分明になっているが。）、中国と外国の合作などの場合には、とりあえず監督が中国（大陸）の監督である場合のみ、中国（大陸）の作品として本論文で取り上げた。

そして、本論文「犯罪・ミステリー映画の日中比較(1)」「犯罪・ミステリー映画の日中比較(2)」において明示し忘れ、大変申し訳ないが、本論文では、中国映画は基本的には中華人民共和国成立後を舞台とする作品、日本映画は戦後を舞台とする作品のみについて扱った。したがって、前近代を舞台とする時代物・歴史物、民国時代の戦争や内戦の時代を背景とするものなどは、除外されている。

なお、本論文は日中の映画の比較をし、その違いを明らかにするものであるが、日中の違いと言っても、傾向としての違いが明確に見られれば、それを違いとして取り上げる。中国のミステリは、そもそも欧米や日本など海外の作品の影響を受けている。中国では、小説においては、1980年代以来日本の推理小説は人気があったし、2010年代、特にその後半には、東野圭吾の人气が極めて高く、それ以外の日本のミステリ作家の作品も多く翻訳されて読まれている。また、アニメでは例えば名探偵コナンなどの推理ものアニメもよく見られている。また、小説をはじめとして、日本・中国とも欧米の影響を受けていることは言うまでもない。中国と日本のミステリ作品が全く懸け離れたものであるということはある得ない。ただ、日中の作品に傾向としての違いは確実に存在しており、本論文はそれを明らかにしようとするものである。

本テーマについては、日中いずれにおいても、先行研究が存在しない。

ページ数の都合により、論文は数回に分け発表、1回目は中国の作品に関する部分を掲載し、2回目～3回目前半は日本の作品に関する部分を掲載、3回目の後半と4回目は、作成した表などを使いつつ日中の比較をし、5回目の今回はその続きを掲載する。枚数の都合上、今回で終わりせず、日中の比較はVol.36 No.2に続けることとする。これにより、日中の映画の比較ができることはもとより、両国の社会や人々の意識の違いをも見て取ることができるものと思われる。

## 1.2 日本映画と中国映画の表について

『名古屋学院大学論集（言語・文化篇）』Vol.33 No.2において、中国の2010年から2018年にかけての毎年度の興行成績ランキングの上位（外国映画・香港映画・台湾映画をも含む上位100位までに入るもの）の犯罪関連映画37本について、以下の58項目についてチェックし、表を作成した。

- 1 探偵が登場する。
- 2 探偵が登場する。自国を舞台とする作に限定。
- 3 探偵ないし探偵的な役割を果たす人物（警官以外）が登場する。
- 4 探偵ないし探偵的な役割を果たす人物（警官以外）が登場する。自国を舞台とする作に限定。
- 5 名探偵ないし名探偵的な役柄の人物の引き立て役となる無能な警官が登場する。
- 6 名探偵ないし名探偵的な役柄の人物の引き立て役となる無能な警官が登場する。自国を舞台とする作に限定。
- 7 プロの探偵が華麗に推理する。
- 8 プロの探偵が華麗に推理する。自国を舞台とする作に限定。
- 9 警官が無能と言うわけではない、ないし頭脳明晰。（警官がそもそも、ほとんどないし全く登場しない場合は△。）
- 10 警官が無能と言うわけではない、ないし頭脳明晰。自国を舞台とする作に限定。（警官がそもそも、ほとんどないし全く登場しない場合は△。）
- 11 推理・謎解きが重要な要素の本格推理。
- 12 視聴者は最初から犯人を知っている。
- 13 探偵・探偵役の人物ないし警察官が、皆の前で推理した内容を披露する。（推理内容が正しい、ないしほとんど正しい場合は◎。間違った推理が披露された場合も、正しい推理内容を推理する場面が後にあれば◎。）
- 14 警察官が主人公であったり警察組織を描くなどの警察もの。
- 15 警察官が犯人である。（警察官以外も犯人である場合を含む。）
- 16 警察組織の問題点に触れている。
- 17 警察と犯罪組織の対立、ないし警察による犯罪組織摘発をメインに描いている。
- 18 犯人を追い詰める警官や探偵などの心の苦しみを描く。
- 19 犯人の善良な面をも十分描いている。
- 20 犯人の苦しみを十分描いている。
- 21 犯罪者の内面に目を向け、犯罪に至らざるを得なかった過程を十分に描いている。
- 22 犯人が主人公。（犯人の立場から描く。）
- 23 無実の人物が、他人を庇い、その身代わりとなって、自分が犯人だと偽りの自首をする。
- 24 社会性のある題材を扱い、犯罪が起きた社会的背景をもしっかり描いている。
- 25 犯人に意外性がある。
- 26 犯罪方法やトリックに意外性がある。

- 27 凶器に意外性がある。
- 28 意外性が、犯人が誰であるかや、犯罪方法のトリックや特殊性以外にある。
- 29 犯罪が残酷，ないし猟奇的。サイコ性がある。
- 30 不気味，ないしホラー性がある。
- 31 連続殺人事件。
- 32 密室殺人事件。
- 33 科学的鑑定場面がある。(プロファイラー以外)
- 34 プロファイラーが登場。
- 35 犯人が精神障害。
- 36 快楽殺人・快楽犯罪(殺人未遂を含む)。
- 37 ゲーム的殺人・犯罪や，劇場型の殺人・犯罪。(殺人未遂を含む)。
- 38 怨恨や復讐のための殺人・犯罪(殺人未遂を含む)。
- 39 他人への妬みないし社会的疎外感による殺人・犯罪(殺人未遂を含む)。
- 40 男女間の愛のもつれにより相手に行う殺人や犯罪(殺人未遂を含む)。
- 41 金銭ないし地位目当ての殺人・犯罪(殺人未遂を含む)。
- 42 口封じのための殺人・犯罪(殺人未遂を含む)。(自分の犯罪以外について他人に知られないための口封じをも含む)。
- 43 自分自身の欲望のためではなく，社会をよくする，ないし悪くしないためと考える殺人・犯罪。
- 44 自分自身の欲望のためではなく，自分以外の誰かのための殺人・犯罪。(復讐は含めない)。
- 45 誘拐や監禁。
- 46 麻薬の売買。
- 47 企業・ビジネスがらみの犯罪を描いている。
- 48 テロリストによるテロ。
- 49 犯罪動機にオリジナル性。
- 50 他殺はなかった。(自殺，事故，未遂，その他のみ)
- 51 毒物の知識など実際の犯罪に役立てられそうな情報が入っている。
- 52 アクションが重要な要素として存在。
- 53 法廷推理もの。
- 54 スパイもの。(警官による潜入捜査は含まず)。
- 55 警官による潜入捜査がある。
- 56 トラベルミステリ。観光地・景勝地での旅情もの。
- 57 時刻表もの。
- 58 コメディ性がある。

中国の犯罪映画の表は，以下の通りであった。(表中の○・×などは，判断に主観の入らざる



名古屋学院大学論集

9	×	◎別記	△	△	○別記	○別記	○?別記	◎	×	○	△	○?別記	○別記	△	×	○	◎(○)別記	○?別記	△	/別記	○別記	△(○)別記	△	◎	△	△	△	△	△	◎				
10	/	◎同上	△	△	○同上	/	/	◎	×	○	△	○?同上	/韓国が舞台	○同上	△	/	○(◎)同上	◎同上	○同上	△	△	/同上	○同上	△(○)別記	◎	△	△	△	△	◎				
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙				
11	◎	×	×	×	×	△	○	△	×	×	×	×	△別記	×	×	◎	×	×	△	△	×	×	×	×	×	×	×	×	◎	×				
12	×	○	×	×	△別記	○	×	×	×	○	×	△	×	×	○	×	△別記	○	×	×	○	×	×	×	○	×	×	×	○	×				
13	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○別記	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	×	×	×	◎別記	×			
14	×	○	×	×	○	○	×	○	×	○	×	×	○別記	×	×	×	△別記	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○			
15	×	×	×	×	×	×	○別記	×	×	○	×	×	×	×	×	×	△別記	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
16	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
17	×	×別記	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○別記	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
18	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○別記	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
19	×	×別記	×	○	×	×別記	×	(△)	×	◎	×	(△)別記	×	×	×	×	◎	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
20	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚			
21	×	×	×	○	×	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
22	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	(△)別記	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
23	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
24	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
25	◎	×	○	×	△別記	×	×	◎別記	×	○	×	△別記	◎別記	○	×	◎	△別記	×	×	△	×	○	△別記	×	×	×	×	○	◎	×	○	×	◎別記	×
26	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	△	×	×	×	×	△	×		
27	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
28	×	×	×	×	×	×	○	○	◎	△	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○別記	×	×	×	×	△別記	△別記	○別記	○別記	×	×	○別記	×	













ホラーとされそうな作品が実は人間による犯罪だったという落ちがある映画作品が、表1の中国作品に少なからず存在する。「②筆仙惊魂3」、「⑧筆仙惊魂」、「⑨孤岛惊魂」、「⑩床下有人」、「⑬B区32号」がそれである。37本中5本は少ないとは言えないであろう。いずれも超自然的現象、霊的な現象と思わせて視聴者に恐怖を感じさせようとする作品である。基本的にホラーを狙って制作された作品ということができる。(なお、「⑮捉迷藏」もホラー映画といえそうであるが、これは人間の狂気による恐怖を感じさせるサイコパス系の作品である。)

日本にも、超常現象の存在する不気味で怖いホラーミステリ(サイコホラーではない作品)はむろん存在し、また、(実は超常現象はなくても)不気味で怖いオカルトテイストのミステリも存在する。例えば、小説においては、例えば古くは、横溝正史は(実際には超常現象的な内容は基本的に書かないが、)おどろおどろしい雰囲気のおカルトテイストの推理小説を書いている。(映画化されたものも多い。)また、ミステリ作家の綾辻行人はホラー要素とミステリ要素の組み合わせられた作品(ホラーテイストのミステリ、ないしむしろホラーに重点のある作品)をも少なからず書き(うち「Another」については、年度興行収入ランキングが高くないので表2には入っていないが、映画化もされている。[2012])、三津田信三もホラー色の濃いミステリを数多く書いている。最近では、大島清昭もホラーミステリを書いている。(むろん、これらは例を挙げてみたものにすぎず、日本のホラー的なミステリ作品は少なからず存在する。)

しかし、超常現象を伴うホラーとされそうな作品が実は人間による犯罪だったという落ちがある映画作品は、実は表2の日本映画43本(日本における2010～2018年にかけての各年度の興行成績ランキング〔外国の作品を含むランキング〕上位30位までに入った犯罪関連映画)の中には1本も存在しない。

表2の日本映画にも、以下のような超常現象や超常現象もどきの見られる作品、ないしはサイコホラーの作品は存在する。

- ⑨デスノート Light up the NEW world
- ⑬⑭トリック (TRICK)
- ⑳悪の経典
- ㉓素敵な金縛り

「⑨デスノート Light up the NEW world」であるが、Wikipedia(2023年8月15日時点)は、「DEATH NOTE」(漫画)、「DEATH NOTE」(アニメ)のジャンルについて、それぞれ、「サスペンス、少年漫画、ドラマ、超自然」、「サスペンス」としている。「(「デスノート」の映画やドラマについて、Wikipediaは2023年8月15日時点において、項目を立てていない。)

また、「Yahoo!知恵袋」に2014年3月14日、「デスノートの漫画のジャンルはなんですか? ダークファンタジー? サスペンス?」という質問が出されている。回答者は3人おり、ベストアンサー及び他の一人の回答者はサスペンスとし、その他の一人の回答者は「サスペンスと少年漫画」としている。

漫画・アニメ以外の映画やドラマについても、当然ジャンルは同様であると考えてよいはずである

もとより作品のジャンルをはっきりと決めることなどはできないが、「デスノート」のジャンルは、やはりサスペンスとするあたりが妥当なところであろう。むろん、サイコサスペンスであるし、サイコホラーの面もないとは言えないが、一般的にホラーとされるような作品ではなからう。人によって見方は異なるかもしれないが、おそらく少なくとも、超自然的な現象によって人を怖がらせることに重点が置かれた作品ではなからう。

「⑩④トリック (TRICK)」についてであるが、Wikipedia (2023年8月15日時点)は、トリック (TRICK) のテレビドラマについて、ジャンルを「推理ドラマ、コメディ」としている。妥当なところであろう。超常現象もどきによる怖さが皆無とは言えないが、犯罪推理、トリックの解明に重点があるし、またコメディであり基本的に怖くない。ホラーとは言いかねるように思われる。Wikipediaはトリック (TRICK) の映画の項目は立てていないが、当然テレビドラマの場合と同様に考えてよいものと思われる。

「③③素敵な金縛り」についてであるが、幽霊は出てくるが、人に害をなそうとする幽霊でも強い能力をもつ幽霊でもなく、生きている人間同様に感じ考える人間的な幽霊であり、かつ善良で情け深い幽霊であり、ストーリーそのものもコメディであり、全く怖い作品ではない。Wikipedia (2023年8月15日時点)は、「法廷サスペンスコメディ・エンタテインメント・ムービー」とする。やはりホラー映画とは言えない。

「③②悪の経典」についてであるが、Wikipedia (2023年8月15日時点)は「悪の教典 (小説)」のジャンルを「サイコ・ホラー」とする。Wikipediaは「悪の経典」の映画についての項目を立てていないが、当然ジャンルは同じと考えていいはずである。この作品は、サイコキラーが引き起こす事件を描いたサイコホラー作品と言える。

上記のうち、ホラー作品とはっきりと言えるのは、「③②悪の経典」だけではなからうか。

ただし、「③②悪の経典」は、幽霊や超常現象による霊的な恐怖を視聴する者の心に起こそうとする類のホラー作品ではなく、人間の狂気・異常行動による恐怖を視聴する者の心に起こそうとするサイコホラー作品である。超常現象・霊的現象を伴うホラー、ないしそう思わせようとするホラー作品は、表2の日本映画にはないと言ってもよいであろう。

そうした点から考えると、超自然的な現象の起こるホラーとされそうな作品が実は人間による犯罪だったという落ちがある映画は、日本の犯罪・ミステリー系映画には稀であり、中国の犯罪・ミステリー系映画には日本におけるよりかなり多く見られる、ということができると思われる。

本論文「犯罪・ミステリー映画の日中比較」の(1)において、表1の作成の際に中国の各映画作品について簡単な説明を記したが、そのうち、「超自然的な現象の起こるホラーとされそうな作品が実は人間による犯罪だったという落ちがある映画作品」は以下の作品である。2011年に3作品、2012年・2013年・2014年にそれぞれ1作品がある。関連箇所のみを抜き出してみる。

㉒ 笔仙惊魂3

不気味で、超自然的なホラー作品に見えるが、途中で人による犯罪と分かる。

28：○ ホラーのようで実は人の犯罪。

51：△ 毒キノコによる幻覚作用の利用が出てくる。ただし、具体的に何というどのようなキノコなのかは明確にされていない。

㉓ 笔仙惊魂

「笔仙(筆仙)」とは降霊術・占いの「コックリさん」のことである。

この映画はホラー作品と言えるが、最後の10分ほどで実は人による犯罪と分かる。犯人水菲児が柳糸糸から劇の主演女優の地位を奪うため、柳糸糸に幻覚を生むLSD成分の入った口紅を渡す。柳糸糸に幻覚が生じ、その精神が錯乱、柳糸糸は川で溺死する。(水菲児は自作自演でナイフで自らを傷つけ、柳糸糸のせいだと見せようとする。)

百度百科「笔仙惊魂」によると、制作グループは、ホラー音楽の十分な効果を得るため日本にも赴いて、室田憲一に担当を依頼している。

なお、中国語で題名に「笔仙」と名の付く映画には、以下の作品がある。いずれもホラー作品(ないしはホラー的作品)とすることができる。

A 「笔仙」(韓国映画「분신사바」の中国語タイトル。日本名「こっくりさん」。2004, 監督:アン・ビョンギ):中国語版があり、また中国映画「笔仙」1・2・3の監督がアン・ビョンギ監督であることから、中国の「笔仙」関連の映画は、もとはこの作品の影響のもとに作られたものと考えられる。(日本のこっくりさん映画は、中国大陸で中国語版が作られたことはない。そのうち、2005年の「こっくりさん日本版」は、香港で広東語・日本語音声/英語・中国語字幕の翻訳版が作られているが、タイトルに「筆仙」が入っていない。また、「KOKKURIこっくりさん」(1997年)・「こっくりさん 日本版」(2005年)・「怪奇都市伝説 こっくりさん」(2008年)・「こっくりさん 劇場版」(2011年)・「こっくりさん 恋獄版」(2014年)など日本のこっくりさん映画の多くないし大半は、上に挙げた韓国や中国の作品とは異なり、こっくりさんをする際、筆ではなく小銭を使っている。)

B 「笔仙1」(2012, 中国映画, 監督:韓国人アン・ビョンギ)

C 「笔仙2」(2013, 中国映画, 監督:韓国人アン・ビョンギ)

D 「笔仙3」(2014, 中国映画, 監督:韓国人アン・ビョンギ)

E 「笔仙惊魂」(2012, 中国映画)

- F 「筆仙惊魂2」(2013, 中国映画)
- G 「筆仙惊魂3」(2014, 中国映画)
- H 「筆仙惊魂4(筆仙魔咒)」(2015, 中国映画)
- I 「筆仙诡影」(2016, 中国映画)
- J 「筆仙咒怨」(2017, 中国映画)

上記のうち、韓国映画のAのみは、人為によらない超自然的要素による真のホラー作品である。

これに対し、韓国人アン・ビョンギ監督による中国映画を含め、中国映画(B～J)においては、基本的に、超自然的な恐ろしいことは、実は犯罪など人間によって仕組まれた怪異など、非超自然的なものである。(精神異常・幻覚・夢によって見るものもある。)これは、広電総局の審査があることによって内容が制約されているためであろう。

ただし、中国映画(B～J)においても、超自然的要素もあるいはあるのかもしれない(?)とも思わせる作も若干存在する。

Cにおいても、恐ろしい怪異はやはり精神異常や犯罪による怪異だとも思われるが、これは解釈次第で見方は変わり、超自然的要素があるのか判然としない。

また、Hにおいては、基本、怪異人為によるものなのだが、最後二十秒ほど、取って付けたかのように、幽霊でも現れたのか(?)とも思われる場面があり、広電総局の審査に合格する範囲内でホラーらしさを演出しようとしていることが見て取れる。Iにおいても、幽霊の復讐と思われたことは実は人間による殺人だったのだが、やはり最後1～2分ほど、幽霊が人に取り付いているとも思われる場面もある。(ただし、これも、精神異常によってそう思われただけかみならず、超自然的要素があるのか判然としない。)これもやはり、広電総局の審査に合格する範囲においてホラーらしい怖さを演出しようとしたことの現れであろう。

なお、日本で作られたこっくりさん映画としては、以下のようなものがある。

- 「KOKKURI こっくりさん」(1997, 瀬々敬久監督)
- 「こっくりさん 日本版」(2005, 坂本一雪監督)
- 「こっくりさん～本当にあった怖い話～」(2007, 福田陽平監督)
- 「怪奇都市伝説 こっくりさん」(2008, 松浦幹三監督)
- 「こっくりさん 劇場版」(2011, 永江二郎監督)
- 「こっくりさん 恋獄版」(2014, 竹川透監督)
- 「こっくりさん 劇場版 新都市伝説」(2014, 仁同正明監督)

これら日本のこっくりさん映画は、いずれも、呪い・霊など超自然的なものが出てくる真のホラー作品であり、恐ろしい現象は実は人間がやっていた、あるいは幻覚だった、といった類の映画は一つも存在せず、中国の作品とは異なる。

中国のホラー系映画は、広電総局による審査基準のもと、犯罪など人為によるものであり(登場人物が精神の異常などで恐怖の場面を見ることもある。), 視聴者としてはあらかじめ

めそのことが見当がついてしまうため、ホラー映画としては十分な恐さに欠ける。また、本論文で調査対象となった犯罪映画でも、日本の犯罪映画においてはホラー系の作品は1つもなかったのに対し、中国の犯罪映画においてはいくつもそうした作品があった。中国においては、広電総局による審査制度のため、ホラー作品を作りたい場合も、超自然的な恐怖の要素がある真のホラー作品を制作することができず、そのため犯罪ホラーといった類の作品を制作することになり、その結果、言わば犯罪ホラーとも言うべき映画のジャンルが確固として存在することになった、とも言えそうである。

なお、上記に関連し、「㉓B区32号」の項をも参照していただきたい。

- 9・10：△（○） 警察はほとんど登場せず、この作品においては重要な存在ではない。ただし、柳糸糸の体内からLSD成分が検出されたことを慕凡に話す場面はある。
- 19：× 犯人氷菲児は基本的には腹黒い人物として描かれていると思われるが、柳糸糸の死後、かつてのことを思い出し、その死を悲しんでいるような場面もある。（1分以内）
- 22：△ 主役の一人。唯一の主人公はいない。
- 27：○ なんと氷菲児が柳糸糸に渡した口紅に、幻覚を生むLSD成分が入っていた。
- 28：○ ホラーのようで実は人の犯罪。
- 33：× ただし、警察官が柳糸糸の体内からLSD成分が検出されたことを慕凡に話す場面はある。
- 41：○ 犯人氷菲児が柳糸糸から劇の主演女優の地位を奪うための犯罪。
- 51：△ 犯人氷菲児が柳糸糸に幻覚を生むLSD成分の入った口紅を渡し、柳糸糸に幻覚が生じ、その精神が錯乱する。

#### ㉔ 孤島惊魂

青年男女8名（実は一人は犯人）が、巨額の賞金をかけたゲームに参加し、孤島に行く。孤島で様々な恐ろしいことに遭い、犯人による殺害により、またお互いの疑心暗鬼による殺し合いのため、最後1名のみが生き残る。ホラー作品に見えるが、最後の十数分ほどで、人による犯罪と分かる。

- 28：○ ホラーのようで実は人の犯罪。

#### ㉕ 床下有人

最初超自然的なホラー作品かと思うが、比較的早い段階で人間による腹黒い策略ということが分かる。主人公氷児のボーイフレンド況宇が、その元のガールフレンド萌萌とグルになって、氷児を殺そうとする。



51：△ 救心丸を服用する心臓病の主人公に糖尿病薬メタホルミン塩酸気を飲ませ殺そうとするというのは、殺人の方法として、実際には無理があろう。確実に殺せる方法による必要があろう。

㊸ B区32号

警官や探偵（的役柄の人物）による推理・謎解きなどはない。（そもそも警官や探偵は登場しない。）

恐怖現象を親しい関係の男女二人（撮影するのは男）がカメラで屋内を撮影し真相を知ろうとするというストーリーで、アメリカ映画『パラノーマル・アクティビティ』（1作目）をまねている。

恐怖の屋敷の話。別荘を買いそこに幽霊がいるとして精神異常を来した沈昂の妻の高雨桐が、友人マイクとともに別荘を調べに来て宿泊。不思議で恐ろしい怪異なことが別荘で次々に起こる。高雨桐も精神異常を来し始める。ホラー作品かと思われるが、最後の数分ほどで、実はすべては人間がやっていたことと分かる。（不動産仲介業者の丁哲が犯人。自分の娘が自動車事故で死んだおり、沈が彼女を救わなかったことを恨んでの犯行。）

中国映画には、超自然的なホラー作品と思えて、最後に人間の犯罪と分かるものが少なくない。今回調査した作品中では、「筆仙惊魂」「筆仙惊魂3」「孤島惊魂」がそうした作品である。（「床下有人」も初めはホラー作品かと思われる。）ホラー的性格を売りとしている作であると思うが、合理的な説明で解釈できるので、個人的には、ホラー作品としての怖みが薄れてしまうようにも思われた。今回調査対象になった日本の映画43作品の中に、このようなホラー作品的な犯罪映画は一つもなかった。（アメリカ映画『パラノーマル・アクティビティ』においては、恐ろしい怪異現象は人為によるものではない。つまり、『パラノーマル・アクティビティ』は、犯罪映画の側面はなく、真の意味でのホラー作品である。また、日本においても『パラノーマル・アクティビティ』の日本版が製作されたが、これも米国版と同様、犯罪映画の側面はなく、真の意味でのホラー作品である。この点、『B区32号』は米国版・日本版と根本的に異なり、超自然的な怪異が存在しない。）中国（大陸）のホラー映画は、実は犯罪（や精神異常）などに関わるものであり、幽霊などの超自然的な存在が本当に存在するものではない。無神論の立場をとる中国共産党のもとでは、封建的迷信の類は批判の対象となり、審査を行う管轄官庁である広電総局が、幽霊が出るなどといった類の迷信的な内容の作品を認めないということが、その背景にあろう。広電総局が2006年に公布した映画基準についての規定（「電影審査規定」（2006年6月22日より施行。2019年12月現在も有効。）には、以下の条項がある。（下線部は筆者によるもの。）「十三、映画には下記に列挙する内容を載せることを禁止する：（電影片禁止載有下列内容：）……（五）国家の宗教政策に違反し、邪教・迷信を宣揚するもの；（违背国家宗教政策，宣扬邪教，迷信的；）

十四、映画に下記に列挙する内容があれば、削除して修正するべきである：（电影片有下

列情形，应删剪修改：）……（四）凶悪な殺人，暴力，恐怖，幽霊や妖怪，靈異などの内容が混じり，真偽・善悪・美醜の価値基準をあべこべにし，正義と非正義の基本的性質を混同させるもの；（夹杂凶杀，暴力，恐怖，鬼怪，灵异等内容，颠倒真假，善恶，美丑的价值取向，混淆正义与非正义的基本性质；）……（以下省略）」

また，2018年，「広電総局内部の審査新規」とされる文書がネット上に広まった。広電総局が一般に公表しているものではないので信憑性に問題があるとは思いますが，内容的には妥当なもののように思われる。ネット上に広がったこの内部文書とされるものに記載されていることについても，一応触れておきたい。（「流传甚广的“广电内部审查新规”，收藏来看」2018年6月18日 [www.sohu.com/a/236455159\\_351788](http://www.sohu.com/a/236455159_351788) [来源：第一制片人 文/一巷]）<sup>1)</sup>

### 「三 題材

……3 科学性を提唱する（3 提唱科学性）

①ファンタジーは今後すべてSF類に分類して審査を回避することができる。（玄幻奇幻魔幻以后可都归到科幻类，以规避审查。）

②唯物主義を堅持し，封建的な迷信を打ち破り，もしどうしても迷信的なストーリーを表現したいというのであれば，夢を見る，精神疾患，想像などとしてストーリーを構想することができるのであり，転生し現実生活の中にやって来るというわけではない。例えば『靈魂摆渡』のような類の題材は，近年は作ってはならなくなった。（坚持唯物主义，破除封建迷信，如果非要表现迷信的情节，可设计成做梦，精神疾病，想象，而不是转世来到现实生活中。如《灵魂摆渡》类题材近年就不要做了。）

（以下省略）」

なお，「⑳笔仙惊魂」の項をも参照していただきたい。

28：○ ホラーのようで実は人の犯罪。

なお，2015年度～2018年度においては，大陸興行成績ベスト100にこうしたジャンルの作品は入っておらず，また，近年，中国のこうした作品を見ることはめっきり減ってしまったように思われる。実際，2010年代後半，中国のホラー映画は急速に人気を失い，作品数も激減した。

以下の記事を見てみよう。（原文は中国語で，近藤による訳。なお，長文であるので，全文ではなく一部の抜粋である。）

「失われつつあるホラー映画 2021年，誰かまだホラー映画を撮っているだろうか？

国産のホラー映画を制作していた人と会社はどこに行ったのだろうか？（原題：「正在消失的国产恐怖片 2021年，还有人在拍恐怖片吗，那些做国产恐怖片的人和公司又去哪儿了？」）」

界面新闻·JMedia (jiemian.com) (<https://www.jiemian.com/article/5838007.html>) 2021年3月21日

文：毒眸 陳楠楠 編纂：張友発

2021年、国内のホラー映画製作者はどこへ行ったのだろうか？

……近年、国産ホラー映画はあまり芳しくない。

……灯塔Proのデータによると、2021年にすでに公開日が決定している国産映画は今のところ5本しかなく、この数字は、2016年には69本だった。

……

5年間で、国内のホラー映画の本数は12分の1近くに減少し、映画の内容も注目されなくなっており、ホラー映画が映画市場から徐々に姿を消していることを検証しているようだ。

……

2021年、まだホラー映画を作る人はいるのか、国内のホラー映画を作る人や会社はどこに行ってしまったのか。そんな疑問を抱きながら、毒眸は主流の映画ファンから忘れ去られ、言及するにも値しないとされている「ホラー映画の制作者」たちに出会った。

牛監督が子供向け教育アプリを制作

かつて『床下有人2』<sup>2)</sup>や『猫眼老太太』<sup>3)</sup>など十数本の中国ホラー映画を監督・プロデュースした牛朝陽が、今は子供向け教育アプリを制作している。

…… (中略) ……

賈沢龍のオフィスは高碑殿のオフィスビルの3階にあり、ホールの1階は現在「哎呀鴨兒童映画テレビ基地」になっている。広々としてがらんとした1階ホールの左側には、簡素な子供用の小さなステージがあり、正面は「哎呀鴨兒童詩詞会」の巨大なポスターである。

「もともと私たちの所には70～80人いた。たくさん制作すれば、それだけの人数を養うことができた。」賈沢龍は無意識にちょっとドアの外を見た。数年前にホラー映画の市場が縮小した後、もともと映画を制作していた各部門は1人の責任者のみ残り、「宣伝と配給であれば20人しかいなくなった。」そのため多くの部屋が空になった。

彼が「たくさん制作した」という時期は、2014年から2017年のことだ。この時期、東陽四月天の毎年のホラー映画制作本数は6～8本だった。そして、公開された国産ホラー映画の数は20本以上だった。その中には興行収入1000万元を超える映画も多く、福建恒業影業が制作した『京城81号』<sup>4)</sup>の累計興行収入は4億1200万元にも及んだ。

「当時、ホラー映画のエンディングを、人為的な陰謀、夢、幻覚、精神病とし、人々はそれがけっこう新鮮であり、まだ見たことがない、と感じた。……」

……

テーマの繰り返しと質の持続的な低下により、国産ホラー映画の評判は徐々に下がり谷底に至った。楊磊はかつて劇場で、15～16歳の少年がホラー映画を見終わった後「またこの4種の結末か」と罵倒しているのを見たことがある。15～16歳の若者ですらわかっているのだから、彼はきっと作品のターゲットとなる観客であるに違いない。彼は見すぎ

たのだ。

観客がこの決まりきった方式に飽きると、2017年以降、市場バブルは急速に崩壊し、ホラー映画の本数も崖っぷちに落ちた。灯塔Proのデータによると、2017年の国内ホラー映画の本数は41本で、2018年にはこの数字は22本となった。

ホラー映画の制作者側も次々に離脱し、2021年になると、極めて少数だけがなおホラー映画の製作と宣伝・配給で持ちこたえており、その中には東陽四月天や基点影視もある。ごく少数にとどまっている。

賈沢龍によると、近年、良い脚本がないため、東陽四月天の制作する映画も減少しており、現在は主に配給事業を請け負っているという。そして2019年、累計興行収入5,625万3,000元を記録した国内ホラー映画『碟仙』で業界の注目を集めた配給会社基点影視も、同様の困難に直面している。『碟仙』以降、楊磊監督を訪ねて提携を求める者が相次いだが、ここ数年、ホラー映画のストックが市場にあまり出回っていないため、彼を訪ねてくるものも少なくなった。

2021年、現在のところ、基点影視はまだ国産ホラー映画を公開しておらず、昨年公開された唯一の『闺蜜心窍』は、2014年か2015年頃に公開許可を得た映画である。

……（略）……

また、以下の記事を見てみよう。（原文は中国語で、近藤による訳。長文であるので、全文ではなく一部抜粋である。）

クオリティが心配されるのと同時に、ホラー映画はビジネスセンスすら失おうとしている。国産ホラー映画の生態観察（原題：「在质量堪忧的同时，恐怖片连生意经也快没了。国产恐怖片生态观察」）

21 经济网 (21jingji.com)

<https://m.21jingji.com/article/20210315/herald/2c3468b260c5eb5b0c9d946df365201b.html>

2021年3月15日

著者：無年

……（略）……

01 国内ホラー映画市場は以前に全く及ばない

二年前、私たちは国産ホラー映画の現状について調査したことがあるが、国産ホラー映画の黄金期はすでに過ぎてしまったようだということに気づいた。（「大刀向国产恐怖片头上砍去？ | 国产恐怖片现状调查」）では、二年が経過した今、この種の映画の苦境は解消されたのだろうか？

答えはノーである。国産ホラー映画は、本数・興行収入ともに以前に大きく及んでいな

いのは紛れもない事実である。

拍sirが2011年から2020年までの毎年の興行収入トップ3の国内ホラー映画を集計したところ、以下のような表になった。表は各年のトップ3の結果だけだが、しかしいくつかの角度からすでに問題をよく説明できている。

(表省略)

国産ホラー映画の黄金期は、あらかし2011年から2014年までであり、中国映画の市場化の発展とほぼ同じペースで伸びている。

2010年以前は、国産ホラー映画はまだ固定したジャンルに発展しておらず、年間制作本数もほんの僅か数本だった。2011年以降、ホラー映画の本数と興行収入がいずれも大幅に増加した。この年、業界には小でもって大を得た2本の映画が現れた。スターの出演しない映画「B区32号」は約8万元ほどのコストで1486万元の興行収入を上げ、もう1本の楊冪主演の「孤島驚魂」はその驚異的なスターの効果により、500万元に満たないコストで9000万元近い興行収入を上げた。

その後、市場はホラー映画というジャンルの発展の可能性を見抜き、様々な種類のホラー映画やスリラー映画が次々に公開された。ホラー映画の制作サイクルの短さ、コストの低さ、収益率の高さから、このジャンルは確かに大きな興行的魅力があり、毎年の創作本数は増加の一途をたどり、時折小爆発とも言えるような作品も現れ、更に僅かなコストで大きな収益を上げた。

2014年、これまでの国産ホラー映画の興行収入におけるチャンピオンが誕生した。恒業による『京城81号』である。コストが高いとは言えないこの映画は、最終的に4億元を超える興行収入を稼ぎ出し、それは現在も破られていない。3年後、続編の『京城81号2』も興行収入が2億元を超え、目下『京城81号3』も制作中である。このシリーズが恒業の一大知的財産となり、少なくともホラー映画の分野では当面、対抗するものがない。

しかし現在見るところ、『京城81号』シリーズの成功は再現するのは難しいようだ。一方では、ベテランの制作・配給会社として、恒業のホラー映画分野での長期的な努力・蓄積は、他の後継会社とは比較にならない。『B区 32号』は、まさしく恒業のプロモーションによって奇跡的な興行収入を達成したのであり、続く『午夜心跳』<sup>5)</sup>、『床下有人』<sup>6)</sup>、『绣花鞋』<sup>7)</sup>など多くの映画がいずれも千万元級規模の興行収入を達成したことも、言うまでもない。一時期、中国のホラー映画ブームは恒業によってゆっくりと牽引されたのである。……(中略) ……

2015年、ホラー映画市場は一転した。量的には、前の数年に積み上がったホラー映画ブームから一転、この年のホラー映画の本数は初めて30本を割り込み、明らかにホットマネーが入ろうとしなくなっていた。また、興行収入の面でも、この年の覇者『封門詭影』の興行収入は2500万元を突破しただけであり、前の数年の興行収入の覇者の前では全く太刀打ちできるものではなかった。

2016年から2017年にかけて、ホラー映画の制作本数は一定の回復を見せ、年間トップの興行収入も以前と同じレベルにまで上昇し、特に2016年には、猫眼pro版の表示によると、映画の「ホラー」「スリラー」カテゴリを含む映画の数は100本をも超えた。

しかし2018年以降、国産ホラー映画はかつての栄光を取り戻すのに苦労している。興行収入は大幅に縮小し、年度トップの「午夜幽霊」の興行収入は僅かに300万元強、年間制作本数は再び40本以下に落ち込んだ。2019年、映画「碟仙」は、比較的平均的な口コミと少数のスター出演者の参加により、年間トップの興行収入を5000万元に戻したが、しかしそれでも国産ホラーの全体的な衰退傾向を止めることはできず、制作本数は更に減少し、わずか20本余りとなっている。

それだけでなく、国産ホラー映画が大型スクリーンに占めるシェアもどんどん低くなっている。以前のホラー映画ブームだった何年かは、映画の質が悪いにもかかわらず、少なくともトップの映画は5000万元以上の興行収入があった。しかし今、ホラー映画の興行収入はせいぜい数百万円であり、2018年の年のすべての中国語のホラー映画の総興行収入は、かつての一本の映画の興行成績にすら達していない。……

上記2本の記事から以下のことが伺われる。

2010年以前は、国産ホラー映画はまだ固定したジャンルに発展しておらず、年間制作本数もほんの僅かであった。

国産ホラー映画は2011年から2014年が黄金期だった。

2016年頃には国産ホラー映画がそれなりにあったが、2017年～2018年に市場バブルが崩壊し、その後数年で人気さが下がり本数が激減した。

(なお、近藤の作成した表1において、大陸における年度興行収入ランキングベスト100〔大陸以外や外国の映画を含む。〕に入る各年度のホラー系犯罪映画の本数は、2010年0本、2011年3本、2012年1本、2013年1本、2014年1本、2015年0本、2016年0本、2017年0本、2018年0本であり、こうした状況に符合するものと言えよう。)

最初、ホラー映画のエンディングとして、人為的な陰謀、夢、幻覚、精神病、が使われた頃は、それが観客にとって目新しく新鮮なものとして映ったが、そうした同様なテーマの繰り返しにより、国産ホラー映画は飽きられて人気を失っていった。

国産ホラー映画を制作していた多くの会社や人材が、人気と興行収入の低下とともに、ホラー映画の制作から離れていった。

こうした状況には、中国の政治体制やそのもとでの映画管理についての広電総局の規程が大きく影響しているものと思われる。

中国（大陸）のホラー映画は、実は犯罪（や精神異常）などに関わるものであり、幽霊などの超自然的な存在が本当に存在するものではない。無神論の立場をとる中国共産党のもとでは、



封建的迷信の類は批判の対象となり、審査を行う管轄官庁である広電総局が、幽霊が出るなどといった類の迷信的な内容の作品を認めないということが、その背景にあらう。広電総局が2006年に公布した映画管理についての規程（「電影劇本〈梗概〉備案, 電影片管理規定」(《電影劇本〈梗概〉備案, 電影片管理規定》<sup>8)</sup>) (2006年6月22日より施行。2023年12月31日現在も有効。) には、以下の条項がある。(下線部は筆者によるもの。)

「十三、映画には下記に列挙する内容載せることを禁止する:(電影片禁止載有下列内容:)  
…… (五) 国家の宗教政策に違反し、邪教・迷信を宣揚するもの; (违背国家宗教政策, 宣扬邪教, 迷信的;)

また、広電総局が2008年3月3日に出した通知《广电总局关于重申电影审查标准的通知》<sup>9)</sup> には、以下の条項がある。

「三、映画に下記に列挙する内容があれば、削除して修正するべきである:(電影片有下列情形, 应删剪修改:) …… (四) 凶悪な殺人, 暴力, 恐怖, 幽霊や妖怪, 靈異などの内容が混じり, 真偽・善悪・美醜の価値基準をあべこべにし, 正義と非正義の基本的性質を混同させるもの; …… (夹杂凶杀, 暴力, 恐怖, 鬼怪, 灵异等内容, 颠倒真假, 善恶, 美丑的价值取向, 混淆正义与非正义的基本性质; ……)」

なお、「出版管理条例」<sup>10)</sup> (「条例」は箇条書き形式の法令の意。) にも以下の条文がある。これは新聞・雑誌・図書のみを対象とする法令ではなく、映像作品などをも対象とする法令である。

第二十五条 任何出版物不得含有下列内容 (いかなる出版物も以下の内容を含むことはできない): …… (五) 宣扬邪教, 迷信的 (邪教・迷信を宣揚するもの); ……

なお、Jホラーの父とも言われる鶴田法男監督は、中国に招かれて監督を務め、Jホラーのテイストをサスペンス・スリラーに盛り込んだ映画『戦慄のリンク』(日本公開2022, 原題・網路凶鈴 2020) の制作に携わった<sup>11)</sup>。この映画は、超自然的現象により何人もが続けて死んでいくかと思われるホラー映画調の怖い作品であるが、実はネットを通じての催眠術による殺人であるということが明らかになる作品である。被害者たちは催眠術により生じる幻覚により、恐怖を感じ、自殺(や他殺<sup>12)</sup>)をする。

「WEB映画マガジン「cowai コワイ」に、「Jホラーの父・鶴田法男監督が仕掛けた、ネット小説が洗脳する恐怖の深淵を描くAIサスペンス・スリラー」というインタビュー記事が掲載されている。(福谷修 2023年1月9日 <https://cowai.jp/interview/11423/>)

鶴田法男監督はインタビューにおいて、「本作は、「Jホラーの父」の最新作ながら、ホラーではなく、AIサスペンススリラーと銘打っています。まずは監督から、本作の見どころについて、お聞かせください。」と福谷に訊かれ、以下のように述べている。

「乱暴な言い方になりますけど、中国ではホラーは作れないんですよ、残念ながら。僕自身は、中国でホラーを作ったつもりだし、限りなく古典的なJホラーの演出で撮ってい

ます。だから日本人からしてみると、ちょっと見飽きたかもしれない貞子っぽい幽霊が出てくるし、いろいろと典型的なJホラーのお約束をみんな守った作品です。最初から、そうした作品を狙ったわけではなく、中国の厳しい規制の中で、やむを得ない選択だった部分があります。中国映画では、幽霊の存在を肯定して描いてはいけないとか、事件が起きた時には警察が解決するというルールがあったり、日本でホラーを作る時のように、当たり前に行うことができるできないんです。

そういう中国の厳しいルールの中で作った作品であり、どうしても日本で考えられるJホラーにはなりえない。それで日本のホラー好きの皆さんには「ホラーではなくて、サスペンススリラーです」って言い方をしているんです。」

実際に中国でホラー作品を作ろうとした日本人のホラー監督が中国において経験した厳しい規制のことが、ここにはっきりと書かれている。

無神論の立場をとる中国共産党のもとでは、封建的迷信の類は批判の対象となり、審査を行う管轄官庁である広電総局が、幽霊が出るなどといった類の迷信的な内容の作品を認めない<sup>13)</sup>ため、中国（大陸）ではホラー映画を制作しようとしても、幽霊などの超自然的な存在が本当に存在するというわけにはいかず、犯罪や精神異常による幻覚などとせざるを得ない。こうした真のホラー映画とは言いかねるホラー映画的な犯罪映画や精神異常の映画は、2010年代にはしばしば制作されたが、いずれも人為的な陰謀、夢、幻覚、精神病、のどれかによるものとせざるを得ず、いずれも同工異曲の作品となってしまう。上記の記事「失われつつあるホラー映画 2021年、誰かまだホラー映画を撮っているだろうか？ 国産のホラー映画を制作していた人と会社はどこに行ったのだろうか？」にも、15～16歳の少年がホラー映画を見終わった後「またこの4種の結末か」と罵倒していたことが紹介されているが、そうした作品をいくつか見ると、別のホラー系作品を見ても、実はそれが超自然的現象ではなく犯罪であること、あるいは精神病や幻覚や夢であるといったストーリーやエンディングがすぐに見えてしまうようになり、飽きられてしまったのであろう。

また、個人的にも感じる場所であるが、ホラーを期待する観客にとっては、そのホラー的現象が合理的な説明で解釈できるので、ホラー作品としての怖みが薄れてしまう、という問題もあるように思われる。上記の記事「国産ホラー映画の生態観察：クオリティが心配されるのと同時に、ホラー映画はビジネスセンスすら失おうとしている」の他の箇所には、『『果樹』という名の映画ファンは、豆瓣において8000本を超える映画を見ている。彼は拍sirに言った。『私はホラー映画を見るのが大好きで、以前（やや前の時期）映画館でたくさん国産ホラー映画を見た。しかし全体として質があまりよいわけではなく、また、満足のいく経験を得ることができなかったため、ここ数年は行くことが少なくなった。』彼はまた言った。『私が国産ホラー映画に耐えられないのは、すべてのことを完全に不可知に帰することができず、必ず合理的な解釈を探してすべてを既定の核心的価値観に合わせようとし、そのことが根本から国産ホラー映画をへんてこで何



であるかもわからないものとし、それが引いては当然その中に没入することをできなくしている。……』とも書かれているが、これもそのことを述べたものである。

更に、基本的に制作者側はホラー的作品を作ろうとして制作しているので、犯罪ものなどとしては内容・ストーリー・トリックなどがよく練られておらず、(程度の問題はあるが)基本的に駄作になりやすい。例えば、先に筆者が日本のホラーミステリ(サイコホラーではない作品)、おどろおどろしい怪奇趣味のミステリなどの例として挙げた横溝正史・綾辻行人・三津田信三の作品も、ミステリとしてしっかり練られて書かれている。中国大陸のホラー的犯罪ものは、ホラー作品を目指しているが超自然的・霊的なものは書けないので、中途半端な出来の悪い犯罪ものになってしまっているように思われる。そうした点にも問題があるように思われる。

また、先に挙げた广电总局が2006年に公布した映画管理についての規程(「電影劇本〈梗概〉備案, 電影片管理規定」(《電影劇本〈梗概〉備案, 電影片管理規定》)の第十四条「映画に下記に列挙する内容があれば、削除して修正するべきである(電影片有下列情形, 应删剪修改:)」の(四)には、以下の内容が含まれている。「……; 過度に恐怖を感じさせる画面, 台詞, BGM, 及び音楽効果:(有过度惊吓恐怖的画面, 台词, 背景音乐及声音效果;)」このような法令がある国で優れたホラー映画を製作するのはとても難しいことであるように思われる。

話題を暫し変えるが、日本にはホラー小説に関する文学賞(「ホラーを名に冠している、ないしはホラーが主要な内容になっている文学賞」)がいくつかある。例えば、以下のような賞である。

横溝正史ミステリ&ホラー大賞(角川書店)2019年に、横溝正史ミステリ大賞と日本ホラー小説大賞が統合されたもの。(なお、角川書店の『幽』文学賞〔旧称:『幽』文学賞〕は、2015年で終了している。):金田一耕助像・賞金300万円

創元ホラー長編賞(東京創元社):書籍化+懐中時計+印税全額

ジャンプホラー小説大賞(集英社):書籍化+100万円+楯+賞状

エブリスタ小説大賞 最恐小説大賞(竹書房・日本文芸社・株式会社エブリスタ):

賞典1 1編につき賞金10万円(最大5編)/賞典2 竹書房賞:竹書房文庫からの書籍化検討、日本文芸社賞:日本文芸社からのコミカライズ検討

ホラー&ミステリー短編大賞(株式会社クリエイティブメディア出版):「大賞」の場合、賞状、賞金30万円、書籍化

中国において、「ホラー(恐怖)」が名に冠された文学賞は存在しない。中国にも、2020年に「怪談文学獎(怪談文学賞)」(北京捧読文化伝媒有限公司)が創設された。これは中国における最初の怪談文学に関わる賞であり、「SF・ミステリ・推理・精怪(精霊や妖怪)などの小説」を幅広く含むものである<sup>14)</sup>。ファンタジー系の作品は含む(そもそも中国には、伝統的にも、有名な『聊斎志異』のような神仙・幽霊・妖狐等につわる虚構文学としての怪異小説も存在し、テレビドラマ化・映画化もされている。)ものの、超自然的な現象(真の超自然的現象)により視聴者を怯えさせるホラーの王道を行くような作品は含んでいないものと思われる。

本論文の扱う犯罪映画という視点で見ると、こうしたホラー系犯罪映画が2010年代の前半から中頃には中国の犯罪映画の一角を占めた。こうした作品は、制作者側が本来はホラー映画を作成したいが、中国の政治状況のもと、幽霊や超自然的現象を作品に持ち込めないため、犯罪映画になったものとも言えよう<sup>15)</sup>。こうした作品は2010年代も終盤となると激減した。それは、幽霊や迷信を排除する中国（大陸）において、本格的なホラー映画を制作できず、その結果、超自然的現象を実は人為的な陰謀によるものなどとする同工異曲の似たような作品ばかり制作されることとなり、また、超自然的現象が合理的に説明できてしまうので真のホラー作品としての雰囲気にも欠き、飽きられたのだと言うことができよう。

日本のホラー作品（ただし、サイコホラーなど超自然的現象の出てこない作品は除く。）であれば、一般に、超自然的・霊的な恐ろしいホラー作品として話を通すであろうし、また、そのような雰囲気をもつミステリ作品の場合、それなりのレベルのものであれば、一般的に、ミステリとしてのトリックや謎解き、ストーリーなどもより徹底的に考えてストーリーを作るように思われる。

中国においては、ホラーとされそうな作品が人間による犯罪だったという落ちがある映画作品が、この論文の調査期間の作品に少なからず存在しており、ただし、そうした作品が多いのは2010年代前半（から中盤にかけて）であり、それ以後そうした作品は激減している。こうした中国の状況には、中国の政治体制やそのもとの映画管理政策がその背景としてあったということができよう。

#### 2.4.10 ショッキングな内容が日本の作品において目立つ

あくまでも程度の問題ではあるが、日中の映画を比較してみると、日本の犯罪もの映画には、ショッキングな内容のものが目につく。（むろんそうした作品が、日本映画全体の中で多くを占めているというわけではないが。）

表2の映画においては、以下の作品がそうした作品であろう。「犯罪・ミステリー映画の日中比較 (2)」「犯罪・ミステリー映画の日中比較 (3)」から、関連箇所のみを引用してみよう。

##### ⑥ 22年目の告白—私が殺人犯です—

2012年の韓国映画『내가 살인범이다 (殺人の告白)』（華城連続殺人事件を元に作られた2003年の韓国映画『살인의 추억 (殺人の追憶)』に着想を得た映画)を入江悠監督がリメイクしたサスペンス。

曾根崎が自分が殺人犯であるという衝撃的な告白本を出版したり（実は刑事牧原の書いたものであるが。）、真犯人（仙道）が獄中で手記を執筆し本として出版されるが、こうしたことは中国ではありえないことであり、こうした設定の作品は中国では製作されないように思われる。（なお、韓国版『我是杀人犯 (殺人の告白)』、日本版『22年后的告白：我是杀人犯 (22年目の告白—私が殺人犯です—)』とも中国で視聴可能である。)

9・10：×？ 判断難しいが、22年間事件を解決できていなかったのも、少なくとも、とても能力があるということはない。

25：◎ 犯人だと思われた人物二人がいずれも犯人ではなかった。全く予想外の人物が犯人。

38：○ 牧村刑事への復讐を図った件

⑨ デスノート Light up the NEW world

ヤガミ月（キラ）とLの闘いから10年後、名前を記入された人物が死ぬデスノート使った殺人者が、再び繰り広げられるようになる。

もともと『デスノート（死亡筆記：死亡筆記）』は、中国でもヒットしたが、2007年4月及び5月、中国の“扫黄打非”工作小组办公室〔「ポルノ・非合法出版物一掃」作業チーム事務局〕は、「『デスノート』は神秘主義・死亡・報復等などのブラックな感情を含んでおり、子供の心に対し非常に大きな負の影響を与え、子供の人格の発達に深刻な影響を与える。」として、『デスノート』等恐怖類の非合法出版物没収の通知を出した<sup>16)</sup>。（そこには神秘主義の内容に対する批判も含まれているが、共産党政権下の中国は唯物主義の立場を採る国である。映画審査の法令「电影剧本〈梗概〉备案, 电影片管理规定」第十三条にも、「映画は以下の内容を含んではならない。……（五）国家の宗教政策に違反し、邪教・迷信を宣揚するもの<sup>17)</sup>」とある。）2015年6月、中国文化部は、日本アニメの取り締まりを強化し、アニメ38作品をブラックリストに指定し、『デスノート』をもブラックリストに記載し、取り締まりの対象とした<sup>18)</sup>。犯罪を煽り社会秩序を乱しかねない『デスノート』の物語設定は、中国政府にとって容認できないものだったといえる。なお、映画ではなく出版物についての法律ではあるが、「出版管理条例」第二十六条にも、「未成年を対象とする出版物は、社会の公德に違反する行為及び違法犯罪の行為を未成年が模倣することを誘発する内容を含むことはできず、恐怖、残酷など未成年の心身の健康を害する内容を含むことはできない。」<sup>19)</sup>とある。

2016年の実写映画『デスノート Light up the NEW world』に関して言うと、三島はもともとデスノートを保有し使用して多くの人々を殺しており、キラの後継者といえる存在だった（ということが終盤が近づいたあたりで明らかになる）が、彼は最後、Lの後継者竜崎に、その後を継ぎ新たに起こったデスノート事件を解決するように頼まれる。デスノートで殺人をする側か、デスノート事件を解決しようとする側か、それは絶対に変わらぬものではなく、善人であるか悪人であるかは固定的で明確なものではない。また、竜崎と死神アーマとの間には心が通っており、三島が七瀬に銃で撃たれそうになり、竜崎が三島を庇い守ろうとした際、アーマは竜崎の忠実な友として竜崎のためにデスノートに七瀬の名を書いて七瀬を殺し、その代償として消滅する。死神すらも優しく描かれている。こうした善悪の曖昧さは、中国の作品には少なく日本の作品に多く見られるものであるように思われる。

なお、『デスノート Light up the NEW world』では、警視庁捜査一課の幹部と思われる須加原が、非常に強圧的なやり方でデスノート対策本部を解散させる。その際、デスノートのルールについて三島が話しても、全く聞かずに耳を持たない。そして、国策としてノートを確認する、と宣言する。それが単に国民の安全のためなのか、それともあるいは国家の都合でノートを利用しようとするといった意味までも含まれるのか、定かではないが（竜崎は終盤において、「国家がデスノートを欲したということだ」と言っており、その見方が正しければ、後者、つまり国家の都合のためということになりそうである。）、いずれにしても、警視庁の幹部が批判的に（少なくとも非好意的に）描かれているように思われる。このように警察幹部を非好意的に描くことは、中国（大陸）の映画には見られないと思われる。（①についての説明を参照されたい。）

14：△ 警官（三島）も主人公の一人。ただし、デスノート保有者であり、普通の人間ではないが。

15：△ 警官三島はデスノート保有者。

25：○ なんと三島もデスノート保有者だった。

26：○ デスノートによる。

27：○ デスノートによる。

### ③② 悪の教典

有能で人気のある学校教師が、自分を疑った者や邪魔に思った者を秘密裏に次々に抹殺していくサイコキラー。他の教師や生徒の親を殺し、またクラスの生徒ほぼ全員を殺害。

中国ではありえないショッキングなストーリー。中国では到底審査を通らない内容と思われる。

なお、中国の映画審査に関わる法令『电影剧本〈梗概〉备案，电影片管理规定』第十四条には、「电影片有下列情节，应删剪修改。（映画に以下のストーリーがあれば、削除して修正すべきである。）……（四）……有强烈刺激性的凶杀，血腥，暴力，……等情节；……；有过度惊吓恐怖的画面，台词，……；（……強烈な刺激のある虐殺，血生臭さ，暴力，……等のストーリー：……；過度に人を怯え恐怖させる画面，セリフ，……；）」とある。

### ③③ 告白

森口悠子・下村優子・北原美月・渡辺修哉・下村直樹5人の告白からなる作品。

生徒に大切な娘の命を奪われた中学校教師（森口先生）の壮絶で冷酷な復讐劇。教師である彼女は、自分の娘を殺した生徒をじわじわ追い詰めていく。

学級崩壊、いじめのポイントさえ設けての生徒間の陰湿ないじめ、先生の娘を殺す生徒（修哉と直樹。修哉は、人づくりに母に認めてもらいたかったため。直樹は、修哉でもできなかった殺人を自分がやってみせようという過剰な自意識から。）、殺人犯の息子と心申し

ようとする母（下村優子）を返り討ちにして殺す生徒（下村直樹）、殺人犯に憧れひそかに毒薬を集める生徒（北原美月）、同級生を殺す生徒（ばかにされたと思い、自分と非常に親しい関係の北原美月を殺す渡辺修哉）、犯罪的行為および完全な犯罪と言えるレベルで冷酷に生徒に復讐する教師（森口悠子）。森口先生は娘を殺した生徒にHIV患者の血の入った牛乳を飲ませたと言い（嘘）、彼らを極度の不安に陥れる。娘の殺人に関わった生徒の一人（渡辺修哉）が、自分を捨てたと考える母親に振り向いてもらうため、学校に爆弾を仕掛けて爆発させ皆を巻き添えにして死のうとするが、森口先生は、彼の弱点ともいえる彼の愛する母親のもとでそれが爆発するように、爆弾を修哉の母親のもとに届けておく。

学級崩壊、生徒の教師に対する無視やいじめ、教師に対する信頼欠如、教師の生徒に対する陰湿な復讐、生徒同士のいじめや殺人、生徒の教師の信頼に対する裏切り、生徒の親に対する信頼の欠如、など恐るべき異常なものがこの作品に満ちている。これらすべて、中国映画ではありえないストーリー設定であり、実際、今回調査した中国映画にこのような要素はない。学級崩壊や陰湿ないじめそのものが日本の学校に多いかと思うが、そもそも、こうした衝撃的な内容の作品は、中国では、たとえ制作しようとしても、こうした作品の発表は認められないのではなかろうか。

37：○ 生徒修哉・直樹の犯罪は目立つことをして認められたかったから。

38：○ 教師の犯罪・犯罪的行為。なお、修哉が美月を殺したのも、ばかにされて怒ってのこと。

「22年目の告白—私が殺人犯です—」は、犯人が連続して6人を殺害する話であるが、そうした連続殺人の映画（・ドラマや小説）であれば中国にも存在する。以下のような点が中国の作品にはありえないショッキングな内容であると思われる。

自分が連続殺人事件の犯人であるという人物が現れ、その男が自分の犯した殺人の内容を「告白本」にまとめたとし、出版会見を開く。/殺人犯本人が執筆したとされる前代未聞の告白本に、国中が熱狂し、ネットを中心に、多くの者が殺人犯に心酔、告白本の出版に合わせ、犯人だという人物がサイン会を実施、心酔する大勢のファンが押し寄せる。/真犯人が獄中で執筆出版した手記の広告が出ている。

このような点が、中国ではありえない衝撃的なストーリー設定と言えよう。国の社会秩序を守ろうとする観点から、中国では審査を通らない内容であろう。

「デスノート」についてであるが、「デスノート Light up the NEW world」ということではないが、「デスノート」のアニメは、中国で問題となってきた作品である。2007年には中国で生徒たちが模倣しようとして学校にデスノートを持ち込んだことから、中国政府は、「日本の人気作品が元になっている、ぞっとするようなノートや雑誌」などの販売を禁止し、2007年5月の段



階で、約2400にのぼる海賊版書籍と400の海賊版ディスクが没収されたという<sup>20)</sup>。2015年6月8日には中国文化部が日本アニメ38作品のインターネット配信を禁止したが、「デスノート」はそれらの作品の一つである。38作品禁止の理由は、「未成年者を犯罪に誘い、暴力や欲情、テロ活動を誇張する内容が含まれる」というものであった<sup>21)</sup>。「デスノート」はそのショッキングな内容から、中国で論争になり、政府によって禁止された作品である。

「悪の教典」は、有能で人気のある学校教師が、自分を疑った者や邪魔に思った者を秘密裏に次々に抹殺していくサイコキラー作品であり、他の教師や生徒の親を殺し、またクラスの生徒ほぼ全員を殺害するという中国ではありえないショッキングなストーリーである。殺害人数が数人ではなく数十人と非常に多いこともショッキングではあるが、何といても教師が自分の生徒（や生徒の親や他の教師）を次々に殺害しているのであり、学校という教育の場においてあるべき秩序が完全に崩壊しており、学校に対する信頼、学校における教師への信頼や秩序を崩壊させかねないようなショッキングな内容であると言える。

「告白」は、学級の完全崩壊、生徒の教師に対する無視・軽侮やいじめ、生徒の教師に対する信頼欠如、生徒による教師の子の殺害、生徒による善意の教師の信頼に対する裏切り、学校を爆破し大量殺人を行おうとする生徒、教師の生徒に対する陰湿で執拗な脅し・復讐、生徒が自分でも知らぬうちにその愛する母を殺すように仕組む教師、偽りのアドバイスをして熱血教師を利用する教師、生徒同士の陰湿ないじめ、唯一の理解者の同級生を殺害する生徒、生徒の親に対する信頼の欠如、生徒の親の教師に対する憎悪、子の親に対する殺害など、恐るべき異常なものがこの作品に満ちている。学校という教育の場においてあるべき秩序などが完全に崩壊しており、これらすべて、中国映画ではありえないストーリー設定である。実際、今回調査した中国映画にここに挙げたような要素は一つもない。これも「悪の教典」同様、学校に対する信頼、学校における教師への信頼や秩序を崩壊させかねないようなショッキングな内容であると言える。

表1の中国の映画にも、異常な連続殺人犯が登場する作品は存在する。「⑦心理罪」「⑨心理罪 城市之光」は、異常な犯人の猟奇的な犯罪によって視聴者を引き付けようとしている面があると思われる。「⑦心理罪」においては、(ポルフィリン症によるものとされているが、) 生きた人間の血を求めて人を殺す犯人が描かれている。「⑨心理罪 城市之光」においては、世間の注目を集めるため、社会的に悪人と見なされている人間を殺人ショーのように目立つ形で殺す犯人が描かれている。(なお、両作品とも、犯人は連続殺人犯であるが、描かれている殺害人数が異常に多いというわけではない。「⑦心理罪」においては、[黒幕ないしその他の犯人計4人による殺害が映画の場面において描かれた被害者は計5名いるものの、] 犯人が生きた血を求めて殺害するのは、[映画の場面の中では] 計2人のみである。しかも、実はその残虐な殺害の場面そのものは描かれていない<sup>22)</sup>。「⑨心理罪 城市之光」においても、犯人が世間の注目を集めるためにいわばショーとして殺害するのは4人のみであり、その他の殺害人数を含めても7人である。)

しかし、上記の日本の作品、とりわけ「デスノート Light up the NEW world」「悪の教典」「告白」などの圧倒的なショッキング度に匹敵するような作品は中国にはないように思われる。

「悪の経典」についての説明においても触れた中国の映画審査に関わる法令『电影剧本〈梗概〉备案, 电影片管理规定』の第十四条には、以下のように記されている。

「电影片有下列情节, 应删剪修改。(映画に以下のストーリーがあれば, 削除して修正すべきである。)

……

(四) 夹杂凶杀, 暴力, 恐怖内容, ……; 刻意表现违法犯罪嚣张气焰, ……; 有强烈刺激性的凶杀, 血腥, 暴力, ……等情节; ……; 有过度惊吓恐怖的画面, 台词, ……; (虐殺・暴力・恐怖の内容が混じったもの……; 工夫を凝らして違法犯罪の増長した氣勢を表現するもの; ……強烈な刺激のある虐殺, 血生臭さ, 暴力, ……等のストーリー: ……; 過度に人を怯え恐怖させる画面, セリフ, ……; )

……」

また, 同法令の第十三条には、以下のように記されている。

「电影片禁止载有下列内容 (映画には以下の内容を載せることを禁止する。):

……

(六) 扰乱社会秩序, 破坏社会稳定的 (社会秩序を乱し, 社会の安定を破壊するもの)

(七) 宣扬淫秽, 赌博, 暴力, 教唆犯罪的 (淫猥・賭博・暴力を宣揚し, 犯罪を教唆するもの)

……」

「デスノート Light up the NEW world」「悪の教典」「告白」などといったような日本映画の圧倒的なショッキング度に匹敵するような作品が中国にはないことには、中国におけるこうした法令の存在がその背景にあると考えられよう<sup>23)</sup>。

## 注

- 1) 「流传甚广的“广电内部审查新规”, 收藏来看」からの引用箇所のみは、今回、この「犯罪・ミステリー映画の日中比較」(5)において修正した。  
「犯罪・ミステリー映画の日中比較 (1)」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第31巻第2号)の該当箇所(p. 45)を修正しておきたい。
- 2) 2014年
- 3) 2016年
- 4) 2014年
- 5) 2010年
- 6) 2011年
- 7) 2012年
- 8) 《国家广播电影电视总局令》第52号 (←部门规章←法律法规)  
中华人民共和国中央人民政府

- [https://www.gov.cn/ziliao/flfg/2006-06/06/content\\_301444.htm](https://www.gov.cn/ziliao/flfg/2006-06/06/content_301444.htm)
- 9) 《广电总局重申电影审查标准 九类内容须删剪修改》  
新浪新闻2008年3月7日  
<https://news.sina.cn/sa/2008-03-07/detail-ikftpnny3996510.d.html>
- 10) 《出版管理条例》(←增刊・2016・2←国务院公报)  
中华人民共和国中央人民政府  
[https://www.gov.cn/gongbao/content/2016/content\\_5139389.htm](https://www.gov.cn/gongbao/content/2016/content_5139389.htm)
- 11) 先に挙げた記事「国産ホラー映画の生態観察:クオリティが心配されるのと同時に、ホラー映画はビジネスセンスすら失おうとしている(原題:《国産恐怖片生态观察:在质量堪忧的同时,恐怖片连生意经也快没了。》)においても、鶴田監督がホラー映画制作のために監督として中国に招聘されたことが書かれている。
- 12) 蔣穹(茗)が妻・蘇曉静(琉璃)を殺害している。
- 13) 中国(大陸)の映画に幽霊が出る作品は稀であるが、皆無というわけではない。例えば、2017年公開の映画「遺忘空間」には、自殺に失敗して幽霊が見えるようになった主人公・小魚のもとに、震災ですでに亡くなっていた両親・弟の幽霊が登場する。(なお、この映画は恐怖心を感じさせることに主眼がある類のホラー作品ではなく、やや喜劇的なところのある作品で、小魚のもとに現れていた幽霊たちが亡くなった家族であったことに小魚が終盤で気づくところから、感動的な心温まる作品となる。恐怖心を感じさせることに主眼がある類の中国(大陸)のホラー作品に、幽霊が登場する作品はないように思われる。)
- 14) 《首届怪诞小说奖揭晓:这些作品展现出一种蓬勃的野生力量》:《新京報》2020年10月1日  
[https://baike.baidu.com/reference/54752747/a4adbV2pB0ZvkNclEPTHp5AU5-uGTGEzVjLvhz338L961cmP99tf1y50UpU\\_prkfQ7UPiilBcOARYQJAaLCRPxj9lrVQBYiMe8m0QIRD50Jlgl](https://baike.baidu.com/reference/54752747/a4adbV2pB0ZvkNclEPTHp5AU5-uGTGEzVjLvhz338L961cmP99tf1y50UpU_prkfQ7UPiilBcOARYQJAaLCRPxj9lrVQBYiMe8m0QIRD50Jlgl)
- 15) もちろん、中国のホラー映画の中には、本論文の扱うような犯罪ものではなく、精神病その他、他人に故意に薬を飲まされるなど以外による幻覚にすぎないものもある。例えば、2017年の映画「京城81号II」も、沼気による幻覚によるもので、そうした作品の一つであるといえる。
- 16) <https://baike.baidu.com/reference/25476/d05c7rDhxi6i8MKH1XXE52Jx5oVfVEWq8NrPY9P3hafRKDsQVgNQBxjqjrNoJFOU9NhxAuNkQu4dqfmWANc37xRto3YylnW9Ohl>
- 17) 电影片禁止载有下列内容, …… (五) 违反国家宗教政策, 宣扬邪教, 迷信的;  
なお、出版物についての法律「出版管理条例」第二十五条にも、「いかなる出版物も下記の内容を含むことはできない。…… (五) 邪教・迷信を宣揚するもの;〔任何出版物不得含有下列内容, …… (五) 宣扬邪教, 迷信的;〕」とある。
- 18) [https://baike.baidu.com/reference/25476/6779KQT8mxtTDaHKEFV0gHqOPG2TQ6L791toLX2L7oQWUPieiqqviNxjxR9aUQvwtz4mALktrLgaMFJMjdfSnU1qiDpA8Lv2VLbBkM8YIz6\\_Bn7maCt0b2](https://baike.baidu.com/reference/25476/6779KQT8mxtTDaHKEFV0gHqOPG2TQ6L791toLX2L7oQWUPieiqqviNxjxR9aUQvwtz4mALktrLgaMFJMjdfSnU1qiDpA8Lv2VLbBkM8YIz6_Bn7maCt0b2)
- 19) 以未成年人为对象的出版物不得含有诱发未成年人模仿违反社会公德的行为和违法犯罪的行为的内容, 不得含有恐怖, 残酷等妨害未成年人身心健康的内容:
- 20) 「世界的に事件や騒ぎを引き起こす『デスノート』, 映画が米国で公開」WIRED 2008年5月21日 <https://wired.jp/2008/05/21/%E4%B8%96%E7%95%8C%E7%9A%84%E3%81%AB%E4%BA%8B%E4%BB%B6%E3%82%84%E9%A8%92%E3%81%8E%E3%82%92%E5%BC%95%E3%81%8D%E8%B5%B7%E3%81%93%E3%81%99%E3%80%8E%E3%83%87%E3%82%B9%E3%83%8E%E3%83%BC%E3%83%88%E3%80%8F/>
- 21) 「中国で日本アニメ38作品が姿消す 突然のネット配信禁止」withnews 2015年6月15日 <https://withnews.jp/article/f0150615001qq0000000000000000W0230301qq000012132A#:~:text=2015%E5%B9%B4%E6%9C%88,8,%E3%81%8C%E5%90%AB%E3%81%BE%E3%82%8C%E3%82%8B%E3%80%8D%E3%81%A8%E3%81%84%E3%81%86%E3%82%82%E3%81%AE%E3%80%82>



- 22) 次の注xx iiにおいて紹介する記事「网剧审查尺度恐再次收紧, 国产悬疑剧 要向《W-两个世界》看齐?」に、映画版ではなくドラマについてであるが、「心理罪」が放映を中断され修正され、多くの暴力的で血なまぐさいシーンを削除されたことが書かれている。映画「心理罪」についても、中国における審査制度の存在によって暴力的で血生臭いシーンなどは削除された、ないし制作者側であらかじめそれを配慮して、できるかぎりそうしたシーンは抑え減らすような努力がされたと考えられよう。
- 23) 『界面新聞』2016年7月30日の記事「网剧审查尺度恐再次收紧, 国产悬疑剧要向《W-两个世界》看齐? (ネットドラマの審査基準がおそらく再び厳しくなる。国産サスペンスドラマは『W-君と僕の世界-』を見習うことになるのだろうか?)」(筆者: 陳夢茹, 編纂: 曹樂溪 <https://m.jiemian.com/article/772879.html>)に、中国の厳しい審査(検閲)制度の実態についての説明があるので紹介する。具体的にどのように審査が行われているか、ある程度知ることができる。(以下は近藤による訳。)

1週間延期の騒ぎを経て、『十宗罪』がついに今週水曜日に正式に放映された。これまですでに放映された四回分から判断すると、血生臭い暴力的なシーンはあまり多くない。しかし、ある情報筋によると、『十宗罪』のプロジェクトは、2年近く前から撮影が行われており、審査上の理由から放映には至っていなかったという。このドラマが突然延期となった原因は再三推測されており、制作者側も放映プラットフォームも最終的な説明はしていないが、審査を通過できなかったという声明らかに最も強い。

『十宗罪』の放映がなぜ延期されたかはともかくとして、ネットドラマの審査制度がますます厳しくなっていることは、間違いない。昨年、現象とすらなったネットドラマ『太子妃』は、プロットの低俗さのため、放映を中断し是正することを要求され、娯楽資本論(近藤注: 記事の筆者のペンネーム)は、かつてその削除された内容について整理してみた。サスペンス・ネットドラマにおいては、(それらの作品だけではなく)更に多く、トップレベルの知的財産である『心理罪』『盜墓筆記』『執念師』『暗黒者』等がすべて、放送を中止し内容を是正してから放送するという運命に直面した。

これらのサスペンス・ネットドラマはいずれも、再放映後、血なまぐさい暴力や低俗なポルノなどのシーンがカットされたことを見つけるのは、難しくない。この一連のネットドラマ是正の嵐の後、(広電)総局のネットドラマに対する審査制度も、徐々に明らかになってきた。: ネットドラマの審査は、オンラインとオフラインの基準を統一し始めた。; ウェブサイトの自主審査の審査員は、総局の訓練と考査を受け入れる必要があり、自主審査後に激しい議論が起きたドラマについては、更に審査され総括される。

しかし、ネットドラマの審査制度がまだ明文で規定されていないため、審査の合否の境界は、常に比較的曖昧としたものである。動画配信プラットフォームも、常にすべて「自己審査」であり、つまりウェブドラマはすべて放映前に独自の審査チームによって審査される。このような環境を踏まえ、多くの制作者も、やはり規程に抵触しないぎりぎりのところを行おうとする。しかし、筆者はインタビューにおいて、プラットフォーム側であるか制作者側であるかに関わらず、いずれもネットドラマの審査制度に対し、怖れと疑惑を抱いている状態だということを知った。この問題に詳しい関係者は、プラットフォームの審査部門が近くに(広電)総局の管轄下に置かれるかもしれないと明かしている。

動画配信プラットフォームはいったいどのように自己検閲しているのか?

動画配信サイトのいわゆる「自主審査」制度は、プラットフォーム(動画配信サイト)が放映前に動画を審査し、規程の範囲を超える内容は削除する必要があるというものである。各動画配信プラットフォームには、それぞれ専門の審査部門があり、プラットフォームの実情に応じて審査チームを設ける。広電総局は専門のスタッフを派遣し、これらの動画配信プラットフォームの審査チームに対し、専門的なトレーニングを

実施し、審査員はみなライセンスを取得して勤務する必要がある。ある審査に参加した業界人から知ったことであるが、彼らはみな職場が費用を出して応募し、トレーニングに参加する。以前、搜狐視頻（近藤注：動画配信サイトに一つ）の監査チームは15人のメンバーがいるとのメディア報道があった。ある業界関係者によると、動画プラットフォームの審査チームは、脚本創作段階と撮影段階のいずれにおいても、さまざまなレベルの審査を行い、映画が完成した後にも最終的な審査を行う。

動画配信プラットフォームの自主制作ドラマのスタッフは、筆者に語った。「プラットフォームは、以前はすべて自主審査であり、恐ろしく血生臭い暴力やポルノの画面は、あってはならないものであり、ドラマが完成してから審査に合わないシーンがあると、それもすべて削除しなくてはならなかった。」

しかし、血なまぐさい暴力、ポルノ画像がどの程度まで可能かは、明確な文献がなく、総局の公布した政策も、大部分は口頭での通知だけである。そのため、「自主審査制度」はプラットフォームにとって、刃の上を歩くように危険なものである。インタビューにおいて、筆者は一方ではプラットフォーム側のこうした困惑を理解したが、しかしより多いのは、彼らが審査制度について避けて語らないというものである。

これより前、『暗黒者1』『盗墓筆記』『心理罪』などのネットドラマは、放映を中断され修正され、多くの暴力的で血なまぐさいシーンを削除された。例えば、『心理罪』の中の人物が皮を剥がされ、変質の犯罪者が人を人形の体に縫い付けたり、警官が身なりを気にせず汚い罵り言葉を発するといった姿は、すべて削除されている。明らかにこれらのシーンは、広電総局の規定した審査の範囲を超えている。しかし、「ネットドラマの長兄」白一驄によると、このシリーズのネットドラマにおいて放映が中止し修正がされたのは、（広電）総局が介入したのではなく、メディアやネット民の誤解や論争に直面した際、トラブルを避けるため、動画配信プラットフォームが自主的に放送を中止し修正してから再び放送したということもあったということである。

自主制作ドラマは一般的に、まず案を報告し、その後、自主審査をする必要がある、とのことである。先の報道から見て、動画配信プラットフォームは自己審査の後に放映することができるのであるが、しかし、反響の比較的大きなネットドラマに対しては、（広電）総局は後にやはり審査に介入する。

プラットフォームの審査員は、総局のプロのスタッフによる研修を受けているが、審査に参加した上述の関係者によると、「いわゆる研修課程は広電総局の法規であり、授業し試験をして証明書を出すのは象徴的なものである。」つまり、内容の審査については、やはり自分たちで把握する必要があるが、多くの場合やはり手抜きがあることが多い。これはおそらく動画配信プラットフォームの最大の困惑の原因であり、自己審査制度は、実際には石に触れて川を渡るように慎重に行うものである。

制作者側はどのように審査制度に対処するのか？

動画配信サイトだけでなく、審査制度の不明確性も、同様に映画やテレビの制作者たちを困惑させている。「ネットドラマの長兄」白亦驄は、「ネットドラマの審査の（可否の）境界については、実は私たちがあまりよくわからない」と言う。

白亦驄は、「基準となる文献がないため、私たちのやり方は、地上波チャンネルの基準に従ってネットドラマを撮ることであり、徐々にテレビ局に近づいていく」と述べた。（広電）総局があってはならないと定めている映像について、彼はその一線を踏み越えようとはしない。

以前、ウェブ・サスペンスドラマ『心理罪』は、血なまぐさい暴力的なシーンがあったため、放映をやめ修正することを求められたが、『滅罪師』においては監督が再びそのレッドラインに触れることはなかったことが見て取れる。『滅罪師』に参加したスタッフによると、多くの視聴者が血まみれの画面をやはり受け入れることができなかったので、『滅罪師』は画像において、多くの均質化の処理を行った。当時、『心理罪』

## 犯罪・ミステリー映画の日中比較 (5)

は死の形式を強調していたが、『滅罪師』は推理に重点を置いた。

また、『滅罪師』の試写会現場でも、筆者は、審査に通らないかもしれないシーンがカットされていることを知った。韓国を舞台にしたのも、審査のリスクをある程度減らすためだと私は思う。しかし、映像以外でも、実は、より深いレベルでの問題は、ドラマの中で表現された社会問題であるはずであり、国内ではどうしても審査を通らないが、韓国では許容度が高いということだ。

それと比較すると、『十宗罪』は、原著そのものの死亡の場面が非常に血生臭く、暴力及びポルノ的な映像が比較的多い、ということに基づいている。この作品は当初、先週の水曜日に放送される予定だったが、ネットユーザーから画面が血生臭すぎると通報があり、延期になった疑いがある。最後まで公式な説明はなかったが、これまで放送されたエピソードに多くの恐ろしく血生臭いシーンがないことから見て、『十宗罪』が1週間後にはじめて放映できた理由は多少明らかになっているといえる。

(以下略)